確かな学力を育成する授業づくりをめざした中堅教員研修プログラムの開発研究

ー授業研究を組織的に推進するためにー

高校教育研修課　主任指導主事兼課長　門脇　千里
指導主事　山田　　潔　　指導主事　長谷川　宏
指導主事　高橋　信之　　指導主事　魚井　和彦

はじめに

団塊の世代の大量退職及びそれに伴う初任者の大量採用により、教育実践、知識、技術等のこれまで学校で積み重ねられてきたものを共有し、継承することが難しい状況が、今後生じる恐れがある。このため、教員の教科指導力向上のための校内研修及び、初任者を含めた若手教員の教科指導力育成のための校内研修の充実がさらに重要となる。

当所の平成17年度の「効果的な高等学校初任者研修プログラムの研究」の中で、初任者は、演習・協議等の参加型の研修方法や研修形態が効果的な研修となると考えていることが指摘されている[1)]。また、教員が互いに授業改善のために授業を参観したり、授業を参観してもらうことにより授業改善を進めていく重要性も指摘されている[2)]。

組織的な研修体制を確立し、教員が授業改善に向けて意欲的に取り組む環境づくりを行うために、公開授業、授業研究会等の校内研修を組織的、計画的に実施し、校内研修を活性化させることが急務となっている。しかし、高等学校では、教科毎の校内研修が中心で、授業改善に向けた組織的な取組に繋がっていない現状がある。確かな学力を育成するために、組織的に校内研修を推進し、若手教員を育てていくリーダーとなる中堅教員が必要であると考えられる。

そこで、当所では中心となって校内研修を推進する「教科研修リーダー」を育成するために「高等学校教科研修リーダー研究講座」を開設した。本研究において、同講座から得られた成果や課題を研究することで、確かな学力を育成する授業づくりをめざした中堅教員研修プログラムの開発研究についての視点を提示する。

1　「高等学校　教科研修リーダー研究講座」の概要

当研究講座は35歳以上の中堅教員を対象に、当所での研修と所属校での実践との繰り返しの中で研究を深めることをねらいとして、年３回の研修を実施した。受講者は、教科研修リーダーとして各所属校での授業改善への組織的な取組を推進した（**図１**）。

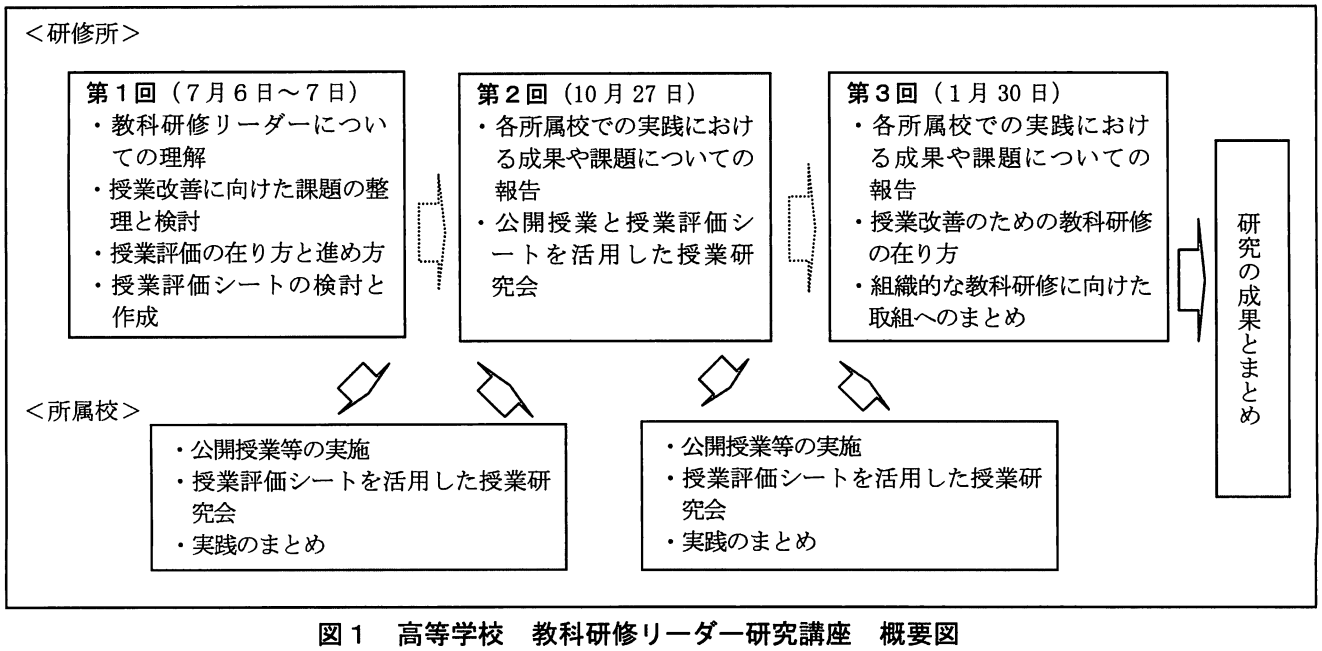

図１　高等学校　教科研修リーダー研究講座　概要図

(1)　研究講座のねらい

確かな学力をはぐくみ、生徒の個性を伸ばすために、授業分析や校内研修の在り方について研修し、授業評価を生かした授業改善を推進するリーダーとしての資質向上を図る。

(2)　研修内容

本研究講座は日程表（**資料**）のとおり、７月、１０月、１月の年３回実施した。

ア　第１回講座

最初に、公開授業や授業研究会等の組織的な取組の必要性や教員が授業改善に向けて意欲的に取り組む環境づくりの必要性について、また校内研修の活性化を推進する教科研修リーダーとその役割について、講義をとおして理解を深めた。

次に、学習指導案の作成、授業の実施と授業評価、そして授業改善というＰ（計画）Ｄ（実践）Ｃ（評価）Ａ（改善）サイクルを踏まえた取組の重要性を学んだ。その後、演習をとおして、授業を録画したビデオをもとに、各受講者が、授業内容、指導方法、生徒の様子等を検討することで授業の分析方法を実践的に学んだ。

最後に、受講者の各所属校の学校教育目標に照らし合わせ、「めざす生徒像」「めざす授業像」を再確認し、それらを実現するための取組を具体的に考え、授業目標や指導方法等の授業評価の観点や、生徒主体の授業の工夫や授業の進め方等の評価項目の設定を行い、授業評価シートを作成した。

イ　第２回講座

受講者の所属校の一つであるＡ高校を会場として実施した。

最初に、受講者が第１回講座で作成した授業評価シートをもとに、各所属校で改善した授業評価シートの活用の工夫について意見交換を行い、第１回講座後の所属校で行った公開授業、授業研究会等の実施上の工夫、所属校での取組から得られた成果と課題、今後さらに工夫を必要とすることやその工夫から期待される成果についてまとめた。

次に、国語、数学、地理歴史、理科、英語の５教科で公開授業を行い、Ａ高校で作成した授業評価シートを用いて授業研究会を行った。

最後に、授業目標の明確化、評価規準の作成、生徒の学習実態の把握等の授業計画の観点及び生徒に対する接し方等の授業実施の観点について、講義をとおして学んだ。

ウ　第３回講座

第２回講座後に各所属校で行った公開授業や授業研究会等について、実施上の工夫とその成果及び課題について発表を行った。それぞれの発表について受講者は、所属校に取り入れたい取組、課題に対する解決策について簡潔に書き留めたキーワードをもとに、次年度の授業研究のねらい、公開授業、授業研究会等の実施とその工夫、授業評価シートの作成とその活用について具体案を作成し、各所属校での次年度の取組を明確にした。

そして最後に、授業実践や教科指導等のこれまでの長い間学校で積み重ねられてきたものを見つめ直し改善していくことの必要性、教科研修リーダーの役割やＰＤＣＡサイクルを踏まえた校内研修の重要性、学校に応じたカリキュラム開発の重要性、授業評価の観点等について講義をとおして学び、本年度の研究講座のまとめとした。

２　授業評価を生かした授業改善に向けた取組

各所属校の学校教育目標に照らし、めざす授業像や生徒像を実現するために、授業評価を生かした授業改善を行う。そのために、授業評価シートを作成し、所属校でそれを活用した。

(1)　授業評価シートの作成

最初に、ワークシート「自校の重点目標と取組」（**図２**）を用いて演習を行った。所属校の教育目標や

「めざす生徒像」「めざす授業像」を再確認し、その生徒像や授業像と所属校の生徒や授業の現状を比較し、「うまくいっている点、良い点」や「改善すべき点、問題点」を明確にした。そして「めざす生徒像」「めざす授業像」を実現するために具体的に取り組むべきことについて考えた。

受講者からは、それぞれの項目に関して、次のような意見が出た。

○　めざす生徒像
- 基礎・基本を身につけ、多様な能力や個性を発揮できる生徒
- 国際社会で活躍できる人材として、リーダー性があり、個性豊かで意欲のある生徒
- 学ぶ楽しさや喜びを知り、自ら学ぶ意欲のある生徒

○　めざす授業像
- 基礎・基本の定着を図るとともに一人ひとりの潜在能力を伸ばす授業
- 体験学習や実験実習を多く取り入れた授業
- 学習内容に興味・関心を持たせ、探求心への動機付けとなる授業

○　うまくいっている点、良い点
- 習熟度別授業、少人数授業を取り入れ、基礎・基本の定着に向けた取組が行われている
- 将来の目標を持ち、努力する生徒が多く、生徒の興味・関心を引き出すことができている
- 教師が生徒の能力を伸ばす取組に熱心である

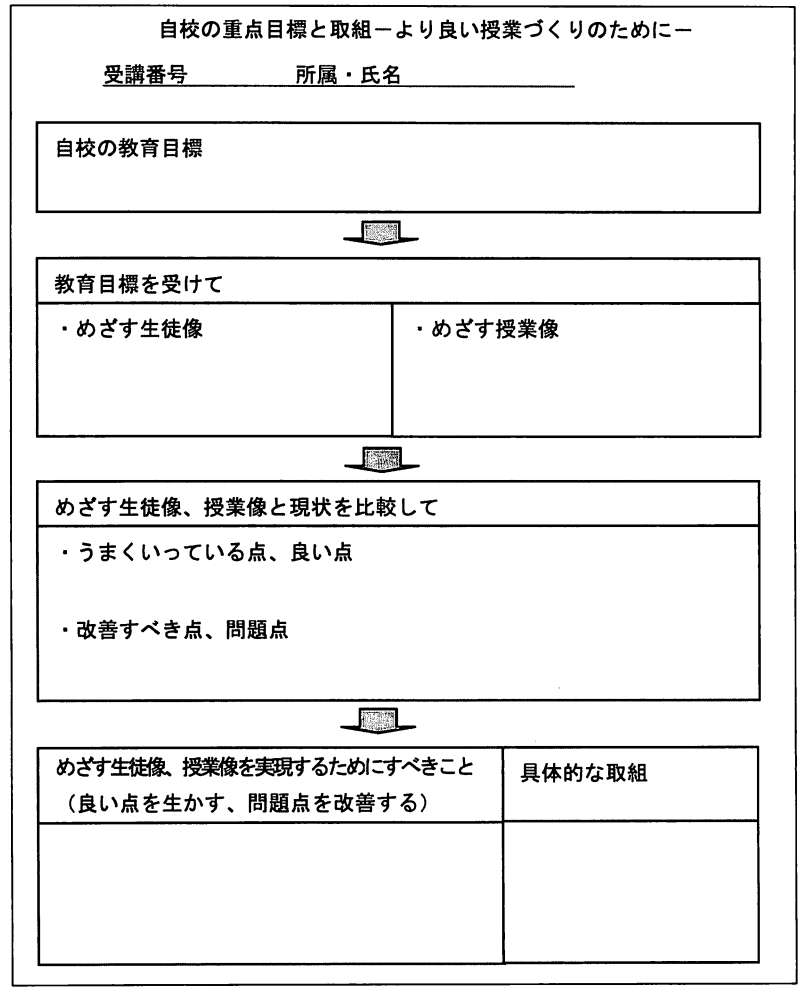

図２　ワークシート「自校の重点目標と取組」

○　改善すべき点、問題点
- 生徒自らが問題意識を持ち、主体的に学習する態度を身につけさせる必要がある
- 生徒参加型の授業展開が必要である
- 授業改善に向けて校内研修に組織的に取り組む必要がある

○　めざす生徒像、授業像を実現するためにすべきこと
- 生徒に目標を持たせ、その目標の実現に向けて取り組む姿勢や態度を育成すべきである
- 生徒が主体的に学習する態度を育成すべきである
- 教師が授業改善に向けて、授業の目標や内容を検討し、教授法についてさらに研修すべきである

○　具体的な取組
- 授業にグループ活動を積極的に取り入れる
- 校内研修組織の見直しや公開授業等を実施する
- 教員が互いに授業について意見交換し、授業づくりにおいて協力し合う

次に、ワークシート「自校の重点目標と取組」（**図２**）による演習で得られた内容を、各所属校の現状

に即して、評価の観点、評価項目、評価内容ごとにまとめ直し、各所属校における授業評価シートを作成した。

(2) 所属校での取組

第２回講座後、受講者の所属校で実施した授業評価シートに係る取組とその工夫をまとめた。

ア 授業評価シートの内容検討とその工夫

受講者が、第２回講座後、所属校での取組で作成した授業評価シート例を**図３**に示す。

評価項目の設定の工夫として、他教科の教員が授業評価シートを活用できるように、教科の専門性の高い項目は避け、評価項目を精選している。項目数が多い場合、授業参観者の記入の負担が大きくなり、また専門性の高い項目が多く含まれる傾向が見られることから、他教科の教員の活用が難しくなるからである。

そして、評価項目の精選により、教科の専門性の高い項目に関する評価が難しくなるというデメリットを解消するため、記入者の意見が自由に書ける欄を設定した。

授業評価シート　　評価　A：良い　B：ふつう　C: 努力を要する

評価の観点	評価項目	評価内容	評価 (A, B, C)	意見等
指導目標	目標設定の明確化	本時の目標は明確か		
		生徒と授業者が本時の目標を共有できているか		
		学習内容が将来どのように役立つかが意識づけられているか		
		生徒の学習状況を把握できているか		
	生徒主体の授業の工夫	生徒は主体的に参加しているか		
		知的好奇心を刺激され、「わかる喜び」、「知る喜び」が実感できているか		
		意欲的に活動させる工夫がなされているか		
指導方法	授業の進め方	授業のスピード、板書の仕方、机間巡視、助言、発問、指示等は適切か		
		既習事項との関連付けができているか		
		生徒が考える時間や質疑応答の時間が確保できているか		
		発表、グループ学習等を取り入れるなどの工夫をしているか		
		理解を深められるような例を教科書以外にも提示しているか		
		生徒への臨機応変な指導はできているか		
	興味・関心	授業での生徒の学習活動は適切か		
		生徒とコミュニケーションが十分できているか		
		実際に使用する場面設定が用意されているか		
		課題は適切であるか		
		予習、復習、課題への動機付けをしているか		
生徒の姿勢	自ら学び自ら考える力の育成	疑問を解決する意欲がみられるか		
		学習内容を発展させていこうとしているか		
		予習、復習、課題等に主体的に取り組んでいるか		
		「クラスでわかろう」とする全体的な意欲が感じられるか		

図３　授業評価シート例

イ 授業評価シートの活用とその効果

受講者は、作成した授業評価シートを各所属校の公開授業や授業研究会等で活用した。

その結果、「授業のねらいが明確になった」「めざす授業が再確認できた」「評価結果を分析、考察することにより授業の課題が明確になった」等の意見がみられ、授業評価シートを活用することで、授業のねらいだけでなく、授業の課題がより明確になった。

また、「授業研究会等において授業評価シートを活用することで、授業評価に対して共通の項目が設定され、意見交換が活発になった」という意見がみられた。授業評価シートの活用により、授業の評価項目や評価内容が焦点化され、効果的な校内研修を行うことができたことがわかる。

さらに、授業評価を伝える際の工夫について、「授業参観で記入した授業評価シートを授業者に手渡し、評価内容を伝えた」「授業参観した教員から直接意見を聞いた」等の発表がみられた。日程や時間的な都合で、授業研究会等を設定できない場合でも、授業評価シートを授業者本人に渡し、評価内容を伝えたり、授

業者が授業参観者に直接意見を聞いたりして、授業評価の内容をより深く理解する工夫が行われた。また、授業評価シートをもとに授業について意見交換をすることにより教員同士のコミュニケーションを図る媒体としての効果もみられた。

3　所属校での校内研修の効果的な実施に向けて

本研究講座の研修内容を踏まえ、受講者がより多くの教員に公開授業や授業研究会への参加や授業評価シートの活用を働きかけることで、他の教員の授業改善に対する理解と意欲が高まり、より効果的な校内研修が実施できると考えられる。以下に、第１回及び第２回講座後、受講者の所属校で実施した公開授業や授業研究会等の取組の工夫と成果をまとめた。

(1)　所属校での公開授業や授業研究会等の取組の工夫

次の受講者の報告からわかるように、各所属校における、公開授業や授業研究会等の取組の中で、受講者は、実現可能なことから取り組み始め、組織的な取組へと発展させている。

- 本研究講座受講を機に、全教員に働きかけ、授業改善に組織として取り組むことを提案し、オープンハイスクールにおける公開授業や授業研究会で授業評価シートを活用した。
- 教育実習と同時期に授業研究週間を設定し、公開授業や授業研究会に多くの教員の参加を得た。
- 担当教科全員による授業参観を可能にするため、時間割変更を行った。
- 授業者だけでなく授業参観者に対しても、授業改善へのヒントが得られるように配慮し、授業研究会への参加にメリットがあることを示すことにより、授業参観や授業研究会への参加を促した。
- 公開授業への積極的な参加や授業研究会で積極的な意見交換を行うために、研究授業の実施要項を作成した。
- 外部講師による講義を実施し、教員全体が校内研修へ積極的に関わることのできる環境づくりを行った。

(2)　所属校での公開授業や授業研究会等の取組の成果

第１回講座では、従前の各所属校での校内研修について、「校務に追われ、研修を行う時間的な余裕がない」「公開授業を実施しても参加者が少なく、授業者は張り合いがない」等の意見が受講者から報告された。忙しさを理由に公開授業や授業研究会等への参加が積極的に行われていなかった状況も見られた。

しかし、第２回講座後の各所属校での取組では、「教科がそれぞれ別々の目標に向いていたが、同じ方向に向き始め、徐々に教科の枠を越え大きな力になりつつある」「公開授業をすることにより、授業研究への意識が高まり、授業改善に向けた教員間の交流が活発になった」等の意見があり、受講者が、教科会やカリキュラム委員会等の場で、授業改善について教員に説明していくことで、教員全体の授業改善の方向性が次第に明確になるとともに、学校全体の取組へと波及し、授業改善への意識が高まったことがうかがえる。

第３回講座では、各所属校での次年度の取組について、公開授業や授業研究会等の工夫、授業評価シートの作成や活用の工夫すべき点を明確にするために演習、協議を行った。そこで、公開授業や授業研究会等について、「率直で幅広い意見を得るために、教科外の教員を含む小グループで協議を行う」「互いに授業を見せ合うという双方向性を取り入れた研修形態を取り入れる」等の意見がみられ、教員同士が意見交換しやすい環境をつくるための工夫を発表している。授業評価シートについて、「教員間で共通の問題意識を持つために、授業評価シート作成過程で評価項目を十分協議する」「教育実習期間に活用し、他の教員の授業評価に対する意識を高める」等の工夫を発表しており、所属校での公開授業や授業研究会等の取組をさらに授業改善に生かすための工夫がみられた。

また、第３回講座終了時には、「３回の研修により少しずつ何をすべきかが見えてきた」「学校を徐々に変える原動力となりたい」「ＰＤＣＡのＣとＡが実践できた」という意見がみられ、所属校において授業改善に対する取組を行うことができたことがうかがえる。そして、研究講座と所属校での実践が進むにつれ、取組での成果や課題が明確になり、受講者は授業改善のために何をすべきかが確認できた。

４　確かな学力を育成する授業づくりをめざした中堅教員研修プログラムの開発に向けて

授業評価シートの作成をとおして、受講者は授業評価に対する意識を高め、授業分析や授業評価の知識と理解を深めることができた。そして授業評価シートを活用することで、授業の評価項目等を焦点化することができ、授業研究会等での協議を効果的なものとした。

公開授業や授業研究会等の校内研修の実施において課題がみられた。そのひとつに教員が日々校務で多忙であるという意識を持っていることで、校内研修への取組が積極的なものではなく、必ずしも効果的に実施できていない状況があげられる。しかし、受講者が、教科会やカリキュラム委員会等をとおして、授業改善に向けた取組について説明し共通理解を求め、公開授業や授業研究会への参加を呼びかけることで、他の教員の校内研修についての理解が深まり、公開授業や授業研究会への参加に繋がった。また、授業評価シートを活用し、ねらいを明確にした授業評価を依頼することで、他の教員の授業改善への理解と意識が高まり、校内研修への積極的な取組が見られた。

研修の形態については、当所における研修と受講者の所属校での実践を交互に行い、ＰＤＣＡサイクルを踏まえ、校内研修を組織的、計画的に実施することにより、次第に受講者の授業改善への理解が深まっていき、授業改善に向けた取組への意識が向上していった。ワークシートを使用した演習を行うことで、受講者は自分の考えをまとめることができ、作成した授業評価シートを所属校での実践に生かすことができた。また、当所の昨年度の研究紀要[1)]で指摘のあった若手教員に有効である受講者参加型の演習を取り入れることにより、授業改善への理解がより深まるとともに、各所属校で実践すべき内容が明確になり、効果的な校内研修を実施することができた。

以上を整理して、確かな学力を育成する授業づくりをめざした中堅教員研修プログラムの開発に向けて、「授業評価シートを活用した授業改善への取組」「中堅教員が中心となった校内研修の効果的な取組」「ＰＤＣＡのサイクルを重視した校内研修」の３つの視点を提示する。

(1)　授業評価シートを活用した授業改善への取組

授業評価シートを作成、活用する中で、受講者は授業分析や授業評価方法を身につけ、他の教員は授業改善への意識を高め、授業改善の理解を深める効果が得られた。また、「めざす生徒像」「めざす授業像」を実現するために、教科の枠を越えた組織的な取組として校内研修を進めることができた。

授業研究会等では、授業評価シートを用いて、教科の枠を越えて授業者及び授業参観者共通の規準で授業を評価し、その評価に関する議論を焦点化することで、活発な議論が展開されるなど、授業評価シートの活用の効果が認められた。

以上のことから、次のことを提示する。

○　学校教育目標、学校がめざす生徒像や授業像を再確認し、それらと所属校の生徒や授業の現状を比較することで、授業改善への具体的な取組を明確にした上で、授業評価シートを作成し、公開授業や授業研究会等において授業評価シートを活用する。

(2)　中堅教員が中心となった校内研修の効果的な取組

受講者が、他の教員に働きかけることで、授業改善への取組が学校全体に波及していったことが明らかになった。これは、受講者が、第１回講座での演習をとおして、授業改善の重要性、教科研修リーダーとその役割をよく理解し、授業研究への手法を学び、他の教員が校内研修に積極的に関わりを持つことができる環境づくりを行っていったからである。

教員の校内研修に対する意識や態度を積極的で、能動的なものにし、効果的な校内研修を行うには、受講者が組織的な校内研修の取組を推進する必要がある。

以上のことから、次のことを提示する。

○　中堅教員が中心となり、組織的な校内研修への取組を推進し、他の教員に授業参観や授業評価シー

トを活用した授業研究会への参加を働きかけることにより、教員全体が確かな学力を育成する授業づくりをめざした取組を行う。

(3) P（計画）D（実践）C（評価）A（改善）のサイクルを重視した校内研修

本研究講座は、当所での講座と受講者の所属校での実践を交互に実施している。演習をとおして研究講座で研修した内容を各所属校で実践し、次の研究講座で、成果と課題を発表、協議することでその実践を点検し、改善する。そして、これを再度繰り返す。最後の第３回講座では、それまでの成果と課題をまとめ、それらを明確にした上で、次年度の所属校での取組に繋げる研修を実施する。このように講座と実践を繰り返すことにより、授業改善への取組を改善し、効果的に校内研修を実施することができた。

以上のことから、次のことを提示する。

○ 授業改善のための実践を効果的に行うことができるように、講義により理解を深めるだけでなく、受講者参加型の演習を取り入れる。また、研修と学校での実践を交互に行い、研修計画の立案、公開授業や授業研究等の実践、その実践に対する評価、評価による改善といったＰ（計画）Ｄ（実践）Ｃ（評価）Ａ（改善）のサイクルを踏まえた研修を継続して行う。さらに、所属校においても受講者はＰＤＣＡサイクルを踏まえた校内研修を継続して行う。

おわりに

自己の資質能力及び指導力の向上をめざし、日々自己研鑽を行っていくことは大切であるが、特に教職経験の浅い若手教員にとって、中堅教員と互いに授業を参観し合い、授業評価を行うことは、今後の教科指導力の向上を図る上で大いに役立つ研修となる。そのために、公開授業や授業研究会等を効果的に実施し、互いに指導力を高め、授業改善を行っていくことは重要であり、公開授業や授業研究会等の校内研修を推進する教科研修リーダーとしての中堅教員の存在は大きい。

今後、教科研修リーダーを育成するために、中堅教員が教科研修リーダーとその役割について理解を深め、授業改善に向けた取組への意識をより高めることができる講座内容を設定するとともに、所属校での授業評価シートの作成及び活用事例、公開授業や授業研究会の効果的な実践事例を集積し、個々の取組の授業改善に対する効果を詳細に検証する必要がある。そして中堅教員が中心となって、各所属校で効果的に研修を推進し、初任者を含めた若手教員の授業改善への理解を深化させ、確かな学力を育成する授業づくりができる中堅教員研修のプログラム開発を更に進めたい。

注）

1）門脇千里、山口豊、小林二城、田靡幸夫、松本修身、山田潔、長谷川宏、高橋信之、市橋真奈美「効果的な高等学校初任者研修プログラムの研究」『研究紀要第116集』，兵庫県立教育研修所，2006，p. 21

2）天笠茂『スクールリーダーとしての主任』，東洋館出版社，1998，p. 130

＜参考文献＞

・常陰則之、石井稔、山田修爾、門脇千里、岡本育夫、岡田学、渡信雄、高橋信之、野口博史「授業改善リーダー育成のための研修の在り方に関する研究（中間報告）」『研究紀要第116集』，兵庫県立教育研修所，2006

・木原俊行『「学習指導・評価」実践チェックリスト』，教育開発研究所，2004

・稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』，岩波書店，1996

資料

平成18年度　6151　高等学校　教科研修リーダー研究講座　全体計画

－授業研究を組織的に推進するミドルリーダーをめざして－

回	月日	講座形態	内　　容	講師・助言者
第1回	7月6日(木)	講　　義	教科研修リーダーの果たすべき役割 －授業の充実をめざして－	兵庫教育大学大学院 教授　佐藤　　真
		協　　議	授業研究の現状と課題 －自校の取組をとおして－	教育研修所指導主事
		講義・演習	授業力の向上をめざして	兵庫教育大学大学院 助教授　永田智子
		演習・協議	授業分析と授業評価の在り方Ⅰ －教科研修リーダーとしての取組(1)－	教育研修所指導主事
	7月7日(金)	演習・協議	授業分析と授業評価の在り方Ⅰ －教科研修リーダーとしての取組(2)－	教育研修所指導主事
		演習・協議	授業分析と授業評価の在り方Ⅱ －授業評価シートの作成をとおして－	教育研修所指導主事
第2回	10月27日(金)	発表・協議	実践から学ぶ ・学ぶ意欲を高める授業実践 ・授業評価を生かした授業改善への取組	高等学校教員等
		演習・協議	校内研修の改善の視点と取組	教育研修所指導主事
第3回	1月30日(火)	演習・協議	組織力を活用した授業研究の在り方 －自校での実践をとおして－	教育研修所指導主事
		講　　義	組織的な授業研究をめざして	兵庫教育大学大学院 教授　佐藤　　真
備　考		３回継続して受講してください。第２回からの受講はできません。 第２回は、県内の高等学校を会場として実施します。		